澂石全集

第十六卷

澈石全集
第十六卷

别册

昭和四十二年四月二十八日　第一刷發行
昭和五十一年三月　九　日　第二刷發行

漱石全集　第十六卷　別　册
定價　二千八百圓

著　者　夏　目　漱　石
發行者　岩　波　雄　二　郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩　波　書　店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

第十六回配本（全十七卷）

目次

藏書の餘白に記入されたる短評竝に雜感

戲曲・詩及小說　一

批評及論文其他　一六六

俳書及語錄其他　二五九

カーライル博物館所藏カーライル藏書目錄　二七三

講義

英文學形式論　三〇一

講演

倫敦のアミユーズメント　三六九

教育と文藝　三九一
無　題　四〇〇
模倣と獨立　四〇四
無　題　四二七

談　話

英國現今の劇況　四三七
批評家の立場　四四九
戰後文界の趨勢　四五三
現時の小説及び文章に付て　四六一
本郷座金色夜叉　四六七
イギリスの園藝　四八〇
水まくら　四八二
無　題 ――巴里の女役者など――　四八七
昔の話　四八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

予の愛讀書　四九二
「余が文章に裨益せし書籍」　四九四
文學談片　四九六
落第――「名士の中學時代」――　四九九
夏目漱石氏文學談　五〇五
文章の混亂時代　五〇九
文學談　五一三
余が一家の讀書法　五一九
「現代讀書法」　五二二
女子と文學者　五二四
人工的感興　五二六
作中の人物　五三一
文章一口話　五三三
文學者たる可き青年　五三八
「自然を寫す文章」　五四一

余が『草枕』――「作家と著作」――　五四三
滑稽文學　五四六
將來の文章　五五二
家庭と文學　五五四
僕の昔　五六二
漱石一夕話　五六七
無題――桂月の事――　五七一
愛讀せる外國の小說戲曲　五七二
夏目漱石氏談　五七七
『坑夫』の作意と自然派傳奇派の交涉　五七八
近作小說二三に就て　五八四
無題――倫敦といふ處は――　五九〇
「露國に赴かれたる長谷川二葉亭氏」　五九二
獨步氏の作に低徊趣味あり　五九三
文章之變遷　五九七

正岡子規　五九八
「處女作追懷談」　六〇三
「何故に小説を書くか」　六〇八
文學雜話　六一〇
無教育な文士と教育ある文士　六一八
專門的傾向　六二〇
「小説中の人名」　六二四
無題 ―文部省の展覽會―　六二五
「文藝は男子一生の事業とするに足らざる乎」　六二六
「新年物と文士」　六三〇
ミルトン雜話　六三一
「私の經過した學生時代」　六三五
文壇の變移　六四三
私のお正月　六四六
「文士と酒、煙草」　六四八

小説に用ふる天然　六四九
ポーの想像　六五一
「予の描かんと欲する作品」　六五四
作家としての女子　六五八
『俳諧師』に就て　六六〇
讀書と創作　六六二
メレディスの訃　六六四
感じのいゝ人 ―「故二葉亭氏追憶錄」―　六六九
「夏」　六七一
テニソンに就て　六七三
「文士の八月」　六七六
「執筆　時間、時季、用具、場所、希望、經驗、感想等」　六七七
汽車の中 ―國府津より新橋まで―　六七八
「昨日午前の日記」　六八〇
色氣を去れよ　六八一

對　話 ―本間久著『枯木』序―　六八四
語學養成法　六八八
博士問題　六九六
博士問題の成行　六九九
西洋にはない　七〇一
夏目漱石氏の談片　七〇二
稽古の歴史　七〇三
漱石山房より　七〇五
『サアニン』に對する四名家の評　七〇七
「文士の生活」　七〇八
漱石山房座談　七一三
釣鐘の好きな人　七一九
夏目先生の談片　七二一
文壇のこのごろ　七二三
沙翁當時の舞臺　七二七

文體の一長一短　七三一
漱石山房藏書目錄　八三二
補遺　八三三
雜篇　八三五
俳句　八三八
書簡　八三九
解說　八五三
注解　八七九
補遺(第二)　九一一
注解　九六〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

藏書の餘白に
記入されたる

短評竝に雜感

William Shakespeare

The Tragedy of Hamlet (Ed. by Edward Dowden. London : Methuen & Co. 1899)

○ホレシオ流の答ナリ、一句ニテHヲ點ズ、他ト異ナルヲ示ス (p. 4. Act I. Sc. i. l. 19 : "*A piece of him*")

○何故ニGhostハ二度登場スルヤ (p. 11. l. 126—)

○Young H. ヲ點ズル所自然ナリ*Coleridge ノ說妥當 (p. 13. l. 170 : "*young Hamlet*")

○奇拔 (p. 14. Sc. ii. l. 4)

○同樣ノ事ヲ異樣ノ語ニテ重疊シテ用フ沙ノ擅場ノ技ナリ (p. 14. ll. 10-3)

○凡テ用辨ノ語ハ劇中ニテ必要ノ語ナリ而モツマラナキ語ナリ (p. 14)

○H. ノ最初ノ語ナリ注意シテ見ヨ、此不得要領底ノ言語ノ心理ヲ論ゼヨ、Col. 參考 (p. 17. l. 65)

○KingトQueenノ語ノ異ナルヲ注意セヨ H. ノ答方KトQニテ異ナルヲ見ヨ (pp. 17-8. ll. 75-86)

○初メテHノ眞面目ヲ點出ス、其不平ナル理由ヲ明ニス (p. 21. l. 129—)

○皮肉ノ語ト解釋スベシ (p. 24. ll. 180-1)

○Hヨリ fatherヲ introduceス妙　(p. 24. l. 184 : "*father*")

○幽靈ノ話ヲ出ス處少々マヅシ、余ナラバH.ノ「余父ヲ見ル樣ニ思フ」ト云フノヲHo.ガ聞イテ薄氣味惡キ思ヲナシアタリヲ見廻ハストHガ不審ヲ起シテ之ヲ詰問スルスルトHoガ實ハカク〳〵ト云フ風ニカク積リナリ　(p. 24. l. 189)

○警句　(p. 25. l. 204)

○寫生的　全体活動ス　(p. 27. ll. 237–8)

○Oph.ノ答辯ノ簡畧ナルヲ見ヨ　(p. 29. Sc. iii. l. 10)

○此等の句にヨレバHamletノ年齡ハ二十五以下に見ユ　(p. 29. ll. 10–3)

○Polハ己レノ子ノ藝妓ノ如キヲ欲スル者ナリ。彼ノ自ラ誇る智慧分別ハ悉ク月並ナリ彼ノ娘ニ要求スル所ノ者ハスレカラシニナレト云フ義ナリ　シテ見ルト彼自身はスレカラシノ大將ナリ、イヤナ奴ナリ　(p. 34. l. 105—)

○Pol.ハ學問モナク見識モナク只現世界ノ游泳術ヲ年功デ覺エタル卑俗ノ輩ナリ。人ヲ見レバ泥棒ト思ヘ油斷スルナ。ト云フヿヲ確信スル下等ナル智慧ノミ發達セル馬鹿者ナリ。自己ノ心ニ誠ナキ故ニ天下ノ何人モ誠ナシト判斷スル男ナリ。此親ト此娘ガ合シテHノ運命ニ一種ノ影響ヲ及ボス所頗ル面白シ。要スルニ三人ノ中ニテPolハ尤モ下等ナリ。HamトOph.ハ弱點ハアレ𪜈下等ナ所ハナキナリ　(p. 35)

○寫實的　(p. 36. Sc. iv. ll. 3–4)

○竪に棒ヲ引ケル處戯ノ全面ニ何等ノ關係ナキノミカ、只此局部丈ヲ批評スルモ詩的ニテモナク寫實的ニテモナシ。アルモ妨ゲズト云ハンヨリハナキ方可ナリ、父ノ死後間モナク母ハ叔父ト結婚シ、不平鬱勃ノ所ヘホレシオの報知ニテ父ニ似タル幽靈ヲ見ニクル「ハムレツト」ノ心中ハ命ガケナリ浮キタル處ナシ。來テ見レバ遠方ニテ絃歌宴舞

ノ聲ヲ聞ク、此所迄ハ頗る可ナリ、此所迄來タナラバ何故之ヲ聞いてハムレツトガ感慨スル所ヲ叙セザル　カヽル不必要ノ事ヲ述ベズニ半ば母ト叔母(原)ヲ恨ム言語ヲ挿入セバ一段ノ興味アルベキ筈ナリ　(pp. 37–8. ll. 13–38)

○奇想　(p. 39. l. 46: "*burst in ignorance*")

○佳　(p. 40. ll. 50–1)

○月ヲ挿入スル所佳　(p. 40. l. 53)

○幽靈ノ登場ニテ一段落。幽靈ノハムレツトヲ麾ク所ニテ二段落　カクスレバ觀客は愈幽靈ニ重キヲ置クナリ。出テ來テ直チニ口ヲ開クヨリモ面白キ波瀾ヲ生ズ　(p. 40. l. 60)

○幽靈始メテ口ヲ開ク(三段落)　(p. 42. Sc. v. l. 2)

○幽靈ノ話一歩ヲ進ム四段落　(p. 43. l. 7)

○「マーダー」ニ至ツテ話頭又一歩ヲ進ム五段落　(p. 44. l. 25)

○Lethe ト云フ所多少姿致アリ　(p. 44. l. 33: "*Lethe*")

○叔父ヲ點綴ス六段落　(p. 44. l. 41: "*my uncle?*")

○一句ヲ挿入ス精彩ヲ見ル　(p. 45. l. 58: "*the morning air*")

○母ヲ出ス七段落　(p. 47. l. 86: "*Against thy mother aught*")

○佳　(p. 47. ll. 89–90)

○ハムレツトの誓フ所ハ此場ノ大段落ナリ戯ノ發展に大關係アリ。此邊ノ叙方甚佳ナリ　(p. 47. ll. 92–112)

○此句は突飛ナリ其理由如何(1)故意ニ狂氣ヲ裝フ始メノ態度カ(2)カヽル場合ニハカヽル突飛ノ滑稽的輕薄の句ガ出るモノカ、非常ニ怖シキ事カ驚ロクベき事又は神經ヲ刺激スルキハ狂氣ニナリ得ルトハ事實ト認ムルヿヲ得ベシ。

狂氣ニナルトスレバ、カヽル返事ヲスルノハ當然ノ事ナルベシ、偖狂氣ニナラザルモ其當時は狂氣ノ人ト同ジ様ナ心的現象ヲ一時的ニ生ズルヿモアリ得ベシ、若シ是アリトスレバ、カヽル返事ヲスルノハ矢張リ當然ノ事トナル。然シナガラ何人モ必ズカクナルカト云ヘバ多クノ証明ト統計ヲ有ス一方ヨリ見レバ種々ノ場合ニ於テ其時ヨリ急ニ躁狂的態度ニ變化スルヿハアリ得ベカラザルやニモ思ハル。……異常の事は讀者ノ凡テ又ハ多クノ經驗に上ラザレバ如何ナル心的現象ヲ引キ起スカ分ラズト云フヨリ仕方ナシ。若シ分ラヌトスレバ此句ノ如キハ批評ヲ許サヾル句ナリ。詩人文人異常ノ事件ヲ設けて其影響ノ人物に及ブ所ヲ叙スル𪜈ハ白トモ黑トモナシ得ベシ是トモ非トモ評シ得ベキナリ。是讀者ノ心得ベキヿナリ。文學は吾人ノ記憶ニ訴フ(Vernon Lee ノ Contemporary Review ニ說ク所要ヲ得タリ)ル以上は自己ノ經驗ニナキ其類ナキヿハ何トモ批判シ難キハ勿論ナリ。但シ役者自身ノヤリ方ニテハ此句ヲイカスヿモ死ナスヿモ出來得ベシ。モシカヽル句ヲカヽル場合ニ用イテ毫モ突飛ノ感ヲ起サヌ様ニ演ズル役者アラバ其人ハヨク沙翁ヲ飲ミ込ミタル者ナルベシ。又觀客の記臆ノ根底ニ潛ム暗流ヲ振盪シ得タル者ト云フベシ。コルリツヂの様ニ議論シ說明シタレバトテ此句ガ自然ニ感ジ得ル様ニハナリガタシ。且コルリツヂは兩天秤ノ議論ヲシテ(1)(2)ヲゴ茶マゼニ述ベタリ

但シ之ヲ quasi-contrast トシテ解釋スレバ非常ノ凄味ヲ生ズ　(p. 49. l. 116)

○Seymour ノ說面白シ　(p. 49. ll. 123–4)

○佳　(1) Swear ノ重キヲ示ス爲メ

(2)場ノ光景ヲ凄愴ナラシムル爲メ　(p. 51. l. 149)

○此句モ前のヒロ、イロ云々ノ句ト同ジク突飛ナリ。心理ハ知ラズ。又ハムレツトノ意向モ知ラズ但此突飛ナ句は非常ノ凄味ヲ生ズ。否生ジ得ルナリ。余ノ講義中 quasi-contrast ノ條ヲ見ヨ　(p. 51. l. 150)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com